

橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な 教員養成に係る研究報告（授業支援）

—授業支援を通じた学生の授業観の変容に着目して—

富山 敦史・佐野 智子（常葉大学教育学部附属橘小学校）・
芹沢 拓実・袴田 奈知・伊藤 綾音

要旨：本稿は、常葉大学共同研究 2021 年度「橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究—ICT 活用による授業観の変容に着目して—」における本学学生による授業支援（2021 年 10 月～2022 年 1 月まで）の成果と今後の課題についての報告である。本授業支援では、学習指導要領の改訂（指導計画作成上の配慮事項）と GIGA スクール構想を踏まえ、学びのユニバーサルデザイン（UDL）やゴードンの教師学、ナラティブの知見を学んだ学部学生 3 人（国語専攻 4 年 2 名、3 年 1 名）の授業支援参加の前と後の授業観の変容を考察して、令和の日本型学校教育に求められる教員の資質・能力や学級経営のあり方の一例を示すことを目標にした。その結果、「話しやすい教員の雰囲気・笑顔」「支えられ支え合う学級経営」「児童個人がカスタマイズできる文房具としての ICT 活用（支援の道具としての ICT 活用）」等を導出することができた。

キーワード：ICT 支援、個別最適化・協働化、資質・能力、UDL、教員養成

1. はじめに

学びの「個別最適化」と「協働化」（中央教育審議会答申 2021）が打ち出され GIGA（=Global and Innovation Gateway for All）スクール構想の実現を背景に、子供自らが ICT 機器を日常的に「文房具のように」¹使いこなせることも盛り込まれ、学びに困難を抱える児童生徒の支援のツールとしての認識が学校現場に広まりつつある。2021 年度中には、教室での 1 人 1 台の環境は整う計画であるはずだが、その機器を子供 1 人 1 人が、自分が学びやすいように自由にカスタマイズできる学びの環境設定には至っておらず、ややもすれば、授業において児童生徒に ICT 機器を使わせるための教員主導の一斉授業に陥る傾向もみられる。こうした背景を踏まえて、2021 年度の共同研究では、「読み書きに課題を抱える児童を中心に据えたデジタル教科書や iPad 等の ICT 機器やアプリを活

¹ 中教審答申 2021「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」P75「遠隔・オンライン教育を含む ICT を活用した学びの在り方について（1）基本的な考え方」参照 [「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）【本文】（mext.go.jp）](https://www.mext.go.jp/)

用した学びのユニバーサルデザイン（UDL）²の観点にたった国語科授業の構築の基盤づくり」を研究テーマに設定し、GIGA スクール構想を念頭に整備された橘小学校のデジタル通信環境下で多様なニーズをもつ児童の学びに資する ICT 活用的一端としてのデジタル教科書・教材等の活用やそれらを根底から支える教員の資質・能力や学級経営のあり方を探ることを目的とした。

本稿で取り上げる授業支援（2021年10月から実施）では、UDLや教師学、ナラティブの知見を学ぶ学部学生3人（国語専攻4年2名、3年1名）が、橘小学校2年1組で授業支援を行い、支援前後の自身の授業観の変容を省察することによって、令和の日本型学校教育に求められている「子供一人一人の学びを最大限に引き出し、子供の主体的な学びを支援する伴走者として」の教員の資質・能力や学級経営の具体的なあり方を導出させることを試みた。

2. 授業支援の実際

授業支援の遂行にあたり、まず以下に示すUDLが掲げる教員（支援者）が児童生徒に提供すべき3つの原則とガイドラインを踏まえた支援の提供を念頭においた。

- ・原則1「取組のための多様な方法（感情のネットワーク「なぜ」学ぶのか）」
※ガイドライン：「興味をもつ」→「努力やがんばりを続ける」→「自己調整」→「目的を持ち、やる気がある」へと提供すること。
- ・原則2「提示（理解）のための多様な方法（認知のネットワーク「何を」学ぶのか）」
※ガイドライン：「知覚する」→「言語、数式、記号」→「理解」→「いろいろな学習リソースや知識を活用できる」へと提供すること。
- ・原則3「行動と表出のための多様な方法（方略のネットワーク「どのように」学ぶのか）」
※ガイドライン：「身体動作」→「表出やコミュニケーション」→「実行機能」→「方略的で、目的に向けて学べる」へと提供すること。

そして、授業後、学生は「授業者（教員）の視点」「授業支援者（学生）の視点」「児童の視点」「授業構成・学級経営の視点」の4つの視点から授業支援を省察した気づきを報告書にまとめ、支援者である学生同士の対話、授業者である学級担任のコメントを交流しながら、次回以降の授業の構築や授業支援に繋げられるポイントを導出、具体化し、次回の支援で活かせるようにした。

これら一連の授業支援を実施するにあたり、以下の順序で進めた。

- ①まず、予備知識に依る先入観を排除するため、事前に児童の実態は呈示せず、学生がありのままの児童の姿を観察したり関わったりすることで、個々の児童の実態と課題を把握すること（最初の2回は観察中心）。

² 「学びのユニバーサルデザイン（UDL）」(Universal Design for Learning) は、アメリカ CAST (Center for Applied Special Technology) が示す学習科学に基づく3つの原則による指導のフレームワークのことである。「学びのユニバーサルデザイン(UDL)ガイドライン」
udlguidelines.cast.org | © CAST, Inc. 2018 | Suggested Citation: CAST (2018). Universal design for learning guidelines version 2.2 [graphic organizer]. Wakefield, MA: Author.
https://udlguidelines.cast.org/binaries/content/assets/udlguidelines/udlg-v2-2/udlg_graphicorganizer_v2-2_japanese.pdf (2022年2月27日閲覧)

- ②つぎに、学生がつかんだ児童の実態や課題を3者（学生・学級担任・研究者）で交流し、学生の見取りと具体的支援が必要な児童を確認するとともに、その児童の課題解決に資する具体的支援のあり方や方法を検討した（対面での検討会）。
- ③学生は、②を踏まえた授業支援を行い、「授業者(教員)の視点」「授業支援者(学生)の視点」「児童の視点」「授業構成・学級経営の視点」の4つの視点から省察した気づきを報告書にまとめ、その都度学級担任に報告し助言を受けるとともに、週1回、研究者と支援内容を振り返り、次時の授業支援に資する方略を検討した（メール検討会および対面検討会）。その際に、特別支援教育のみならず、UDLや教師学、ナラティブの知見に学びながら、多様なニーズをもつ児童の学びを支えていく学級経営や授業づくり、具体的な支援等のあり方やそれらを可能にする教員の資質・能力等についても協議し、具体的な関わりや支援ができるように実践力をエンパワメントしあった。
- ④ICTを活用した支援については、まずは児童自身が意欲的に楽しみながらタブレット使用に取り組める環境を整えることを重視した。そして、それぞれの児童の実態に応じて、児童自身が適切な使い方（紙のノートとの使い分けや入力方法の選択、文章の読み上げ等のカスタマイズ機能の活用）ができるような支援を考えた。特に授業での国語科デジタル教科書の導入が間もないことや児童のタブレット取扱いが不慣れなことを考慮して、タブレットを使用することが児童の新たな負担とならないように配慮することを念頭においた。
- ⑤ICTありきの授業構築に囚われず、授業者がこれまで積み上げてきた先行実践の知見および授業構築の基本的姿勢に立ちかえって、児童をきめ細やかに見取り、その課題を明らかにしつつ、どの子にとっても学びやすく、児童自らが学びを深めていけるようにICTを文房具のように活用し、支援の可能性を広げていくことが重要であることを確認した。

○授業支援の期間と教科内容

期間は、2021年10月19日(火)～2022年1月14日(金)³間の学校行事等を除く原則火曜日と金曜日の3・4限に合計16回（全34時間）実施した（詳細は以下の通り）。

◆国語（17時間 学級担任：佐野先生）

1019 国語「わかりやすくせつめいするためのひみつをさぐろう」

1022 国語「とべとべ回れ」

1026 国語「絵を見ながら作ってみてどうだったかな」

1029 国語「読み合おう」

1102 国語「あきを見つけて書こう」

1105 国語「がんばってるよ、こんなこと」

1109 国語「がんばっていることを思い出し、話すことを書こう」

1112 国語 きつねのおきゃくさま（物語「きつねのおきゃくさま」）

1116 国語「きつねはどんなきつねなのか考えよう」

1119 国語「きつねのおきゃくさま 第1場面のきつねの気持ちを考えよう」

1203 国語「文のおしまいの言い方を考えよう」

³当初は3月迄の実施計画だったが新型コロナウイルス感染状況拡大により以降はやむなく中止した。

- 1210 国語「発表会」（児童たちが考えたほしいものを紹介する）
- 1214 国語「水ふでで書いてみよう（書写）」（学生による提案授業）
- 1214 国語「とめ・はね・はらいに気をつけて書こう（書写）」（学生による提案授業）
- 1217 国語「水ぞくかんのしいくいん」
- 1221 国語「場めんを分けよう」（物語「かさこじぞう」）
- 0111 国語「あん心して、うちに帰った時のじいさまの気持ちを考えよう」

◆算数（8時間 学級担任：佐野先生）

- 1019 算数「かけ算のしきを考えよう」
- 1026 算数「ゼリーの数を調べよう2」
- 1102 算数「ケーキの数を調べよう」
- 1109 算数「三のだんの九九をおぼえよう」
- 1116 算数「2のდანから5のდანまでのひみつを見つけよう」

1217 算数「かけ算（どんな計算になるかな）」

- 1221 算数「九九をつかってくふうしてもとめよう」
- 0111 算数「折り紙を同じ大きさに2つに分けよう」

◆情報（8時間 専科：久永先生）

1022 情報「ビスケット」

1029 情報「プログラミング コードスタジオ・ビスケット」

1105 情報「コード・ビスケット」

1112 情報「ビスケット 自分で計画を立てて作る」

1119 情報「自分で考えたプログラミングを作ろう」

1203 情報「自分でプログラムした作品を発表する・コードスタジオ」

1210 情報「クリスマスカードを作ろう」

0114 情報「プログラミング ミニロボを動かそう」

◆生活（1時間 学級担任：佐野先生）

0114 生活「わたし たんけん(友達とすてきカードを交換しよう)」…公開授業

3. 学生の変容

◆学生 A

(1) 支援前の授業観（考えていたこと・課題にしていたこと等）

- ①学習指導要領の各教科内容を児童に理解させる「授業設計」の構築方法。
- ②教科内容から子供の興味を引き出す楽しいと思える授業のイメージが曖昧。
- ③担任として児童の力を最大限に引き出す指導方法とその環境設定の困難さ。

(2) 支援後の授業観（学んだこと・気づいたこと）

- ①教師の笑顔の大切さ→教師から溢れ出す明るく楽しくなる雰囲気醸成。
教師の表情は児童の表情の鏡であること（笑顔は教師の大切な資質である）。
- ②教師が児童の思いを言葉にすること（児童が自分のことをわかってもらえていると感じることに繋がる）●言葉がけの例：（課題とした問題を解いている場面で）
「解けなくて心配にならなくて大丈夫ですよ」→児童の不安の軽減→教師への信頼

③教師が自分の気持ちを児童に伝えること＝「私メッセージ」〈I message〉→これが相手意識にも繋がること ●言葉がけの例：（回収したテストプリントの向きがバラバラなときに）「私が丸付けをするとき困っちゃうな」

②、③の言葉がけは、子供の思い、教師の思いを言葉にしていくというゴードンの提唱した「教師学」⁴の考え方に通ずるところがあると気づいた。

④一人ひとりに目を向けること（個に応じた支援とUDL支援の必要性）

例えば、書きが苦手な児童には、まず児童が思っていることを言葉にさせて発言させることや児童の発言内容を教師自身が児童のノートに書いていくことで、児童は「自分の思いをノートに示すことができた」だけでなく、「相手に思いを伝えることができるという喜び」を感じることができたとも捉えられると気づいた。

佐野先生の「子供にとって平等に接することは、同じことをみんなに提供することではない」という考え方は、「児童にとって平等に支援をすることとは何か」を考え尽くしたUDLの視点に立った支援であることを学んだ。子供が苦手なことをカバーしつつ力をつけようとする佐野先生の支援方法から多くの具体的学びがあった。

(3) 今後の展望

①支援をする中で授業設計の大切さはもちろん、授業の中での子供の「人間性の育て方」をも学んだ。また授業のあり方や教師のあり方を、教師学やUDLなどの考え方と結びつけて考えることで、個々の子供に提供できる具体的な支援の数々や子供たちから学べるものの多さを、身をもって感じることができ、子供への思い（慈しみとリスク）がより一層強くなった。

②だからこそ、「子供の思いを理解すること」をもっと学んでいきたいと考えた。子供の思いがわかるからこそ、子供に声をかけることができ、支援することができる。そして、子供からの信頼を得ることができる考える。子供の思いをまだ理解できていない間は、子供と向き合う時間を大切にしていきたい。佐野先生は、休み時間に子供たちと「他愛ない会話」を常にされていた。このような子供とよく話し、子供を良く見る教師の技が子供理解へと繋がると考える。家庭環境が違うなかで生きてきた子供たちのすべてを理解することは難しいが、理解することへの前提として、まずは子供を良く観察すること、子供たちとたくさん遊び、関わり、少しでも子供と心を繋げたいと思う気持ちを持つことが大事だということに気づかされた。

（袴田奈知 国語専攻4年）

◆学生B

(1) 支援前の授業観（考えていたこと・課題にしていたこと等）

- ①児童たちとの信頼関係の築き方や児童に信頼される自己開示の仕方。
- ②集中を保つことのできていない児童との接し方や声の掛け方に対する理解。
- ③クラス全体が楽しく、かつ、十分な学習が得られる授業作りの方法。

(2) 支援後の授業観（学んだこと・気づいたこと）

⁴ T・ゴードンが考案した「教師学」（教師のための人間関係訓練教育プログラム）では、教師と子供の「聞く・話す」の関係を前提としている。教師は子供の思いを言葉にすることで子供にとって教師が自分の気持ちを分かってもらえているという安心感から教師への信頼を強めていき、自分から思いを伝えたり、頼ったりすることができるようになるというものである。

①児童一人一人の成長を発見し、全体に共有する声かけの重要性

先生が「〇〇さん、今日はすごく頑張って手をあげているね！」と、その場での頑張りを言葉で伝えることで、児童を伸ばし、他の児童も真似をしようとするようになるということ。

②授業中に児童たちが感じた疑問や気づきを声に出して言うことのできる環境づくり

ある児童の発表後「〇〇さんの言っていることってどういうこと？」と、他の児童が疑問を持つ場面があった。その際、発言力のある児童が自分から立ち上がって「〇〇さんはこういうことが言いたいんじゃないかな」と言っていた。思ったことをすぐに言葉にして共有できる環境づくりが学習を深めることを知ると同時に、発言力のある児童をきっかけとしつつも、教室内のすべての児童全員が学びを深めることのできる支援であることを実感した。

③発言することに困難を感じている児童も主体的に学習に取り組ませるための支援

普段あまり発言や挙手を活発に行うことのできない児童が自分の考えを持っている素振りを見せた際には、「〇〇さんどうぞ」と先生から声をかけることで発表する機会を保障する場面があった。また、発言を譲ってくれた他の児童に対して「優しくできましたね」と授業中や授業後に褒め、児童に感謝する声かけを行っていた。発言の得意な児童のみで授業を展開するのではなく、教室から出た小さな意見をも取りこぼすことなく取り入れ、全体での学びとするための支援のあり方の必要性を実感した。

④時間をかけて丁寧に机間指導を行うことによる児童理解の重要性

発表やノートの記述だけでは児童の状況を完全に把握し理解することはできない。児童が実際に学習に取り組んでいる姿を、教師が間近で観察することにより、はじめて児童が抱えている個人の課題を見つけることができ、解決する手助けをその場で具体的に児童に提示できることを学んだ。丁寧な机間指導の技は支援の重要な鍵となる。

(3) 今後の展望

①児童との信頼関係形成のために机間指導などを通して児童を細かく観察し、たくさん褒めることが重要であると再認識した。多様な児童すべてを笑顔で受け入れる姿勢をつねに持ち、表現していくことで、児童たちに安心感を与えることのできる教師になれるよう心がけたい。

②発言力のある児童ばかりで授業を展開するのではなく、クラス全体での学習の場を提供できるような支援を心がけたい。発言力のある児童の話し方などの様子を良い見本として全体で取り上げることで、他の児童も真似をしようと努力をする。それぞれの児童の実態に応じた褒めるタイミングや言葉がけの内容等も大切にしたい。

③クラス全体が楽しく、気持ち良く授業が展開できるよう、児童同士の対話を多く取り入れた授業作りを行っていききたい。児童が感じたこと、考えたことを素直に言葉で表現できる温かい受容的な学級環境を作るために、普段の学校生活での児童との何気ない対話を通して児童理解を進めていきたい。 （芹沢拓実 国語専攻4年）

◆学生C

(1) 支援前の授業観（考えていたこと・課題にしていたこと等）

①学級には様々な児童が在籍しているため、発問や指示の出し方等、学級全体への指導法を改善することで、どの児童にも分かる授業を創り出せること。

②机間指導の際、課題を行うことができない児童に対しては理解に繋がる糸口を提示していたが、それ以外に、机間指導での児童の課題の捉え方や支援の具体的方法を知りたいと考えていたこと。

(2) 支援後の授業観（学んだこと・気づいたこと）

- ①全体への指導法の改善に加え、授業内で困難を抱えている児童に個別に支援を行いつつ、授業の中で児童全員が授業に参加できるようにすることが大前提であること。
- ②机間指導の際には、児童1人1人の課題がどこにあるのかをより細かく理解し、個別の支援方法を考え、児童に対して「授業内でできること」を行う必要があること。
- ③個別の支援を行いつつ学級の児童全体が学ぶことができる環境を作り出すためには、その土台として学級の雰囲気作りが重要だということ（教師が常に笑顔でいることは教室全体の雰囲気や児童の感情の面にもプラスに働いている）。個別の支援方法を考えると同時に、支援できる雰囲気（ケアしケアされる）作りも大事であること。
- ④児童の良くないところ、できていないところを指導するのではなく、良いところを褒めることで、児童たちにとってほしい行動に導くような指導が大切であること。

(3) 今後の展望

①児童を正しく見取ること

児童の言動や行動の表われの原因を一つに決めつけるのではなく、様々な原因の可能性を考えていく必要があると考える。そのためには、課題とその課題に対する知識を増やし、その原因を様々な角度から考察できるようにしたい。

②支援方法の幅を増やすこと

GIGA スクール構想が進み、1人1台のICT機器の活用が可能となった今、児童に提供できる支援の幅が広がったので、教師として、その支援方法を有効に活用できる知識、技能を身に付けていきたい。

③学級の雰囲気作り

教師側が率先して児童のありのままを受け入れる態度をもち、児童の良いところを認めていくことで、児童たちにもその雰囲気が伝わり、個別の支援の提供ができる雰囲気が生まれる。支えられ支え合える学級の雰囲気作りができるように学んでいきたい。

（伊藤綾音 国語専攻3年）

4. 学級担任としての学生の見取りと気づき

授業支援を行った学生3人を見取りと気づきをみると、2年1組の学級経営方針と重なることが多く、4月から取り組んできた学級担任自身の指導に対しての振り返りと自己評価につながった。4月に立てた学級経営方針は以下の通りである。

○教室が、安心して学び合える仲間のいる、明るく楽しいところになるよう、温かい学級づくりに努める。

○自分たちで考えて実行することを増やし、やる気と自主性を育てる。

○自分たちの取り組みを「見える化」し、よさを自覚させ、自信をもたせる。

2年1組の児童は、授業にまじめに取り組む子が多い。また、できるようになりたい、がんばりたいという向上心をもっている子も多い。その反面、自分の考えはもっていても、挙手・発表に消極的な子がいる。また、基礎学力に大きな個人差がみられる。これらの児

童の実態から、どの子にも確かな学力をつけるために、3つの手だてを指導の重点とした。

○明確な発問や指示をし、学ぶ楽しさをどの子も実感できるようにする。

○聴く（話す方を見る、うなづく）、話す（相手を意識する、声量）など、様々な場面で相手を意識させ、皆が参加する授業、皆でつくる授業を心がける。

○授業で子供をのぼすという姿勢をもち続け、子供たちの主体性や創造性を大切にしたい授業を心がける。

4月から、どの子にとっても学校に居場所があり、教室が居心地のよい場所になるよう、そして、安心して自分の思いや考えを言える雰囲気作りに努めた。また、互いに関わり合う中で、集団生活が気持ちよく送れるよう「思いやる心」の育成を図るとともに、周り（人、もの、こと）への関心やこだわりを強化した。さらに、よさを「見える化」し、自覚させたり、よいところをほめ、自信を育み、さらなる成長へとつなげ、やる気に勢いを付けたりすることも意識して取り組んできた。

授業支援の成果と課題は、以下のようにまとめられる。

①成果

- ・3人の学生が言葉や表現は違うものの、授業支援を通して2年1組の学級経営方針について気付くことができていた。
- ・学級の指導者として、複数の目で、ありのままの子供を捉えていくことができた。授業内の子供の様子を学生たちに教えてもらうことで、学級担任として、より一層子供の実態を正確に捉えることができた。
- ・学生作成の授業支援後の報告書から、学習指導要領における3観点（知識・理解、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）において、子供の苦手なところやつまづいているところを見つけることができた。
- ・UDLの考え方や読み書きに困難をかかえている子供についての理解などを学ぶ機会を得ることができた。
- ・支援後の毎回の報告書を参考にして、指導者としてPDCAサイクルを機能させて授業改善を心がけることができた。

②課題

- ・授業支援を通して、つまづいている子供を見つけることはできたが、適切かつ具体的な支援方法を考えることはできなかった。コロナウィルス感染拡大に伴う支援期間の短縮にもよるが、対象児童の支援前と支援後の個の変容を評価するまでには至らなかった。
- ・クラス担任だけでなく、学年間や全職員で意義やねらいを確認し、めざす児童の姿を共有するとともに、学習につまづく子供への理解と支援の方法を学校全体で考えていく必要があることが浮き彫りになった。
- ・指導者がICT機器を使いこなせていない実態がある。タブレットのカスタマイズ機能等を使つての授業など、一人一人の児童の実態を踏まえ、個に合った授業内でのICT機器の効果的な使い方を身に付け、授業展開を考える必要がある。

多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、個に合った指導、支援、学習環境を整えて、公正な個別最適な学びをめざして授業改善をしていきたい。（佐野智子）

5. 授業支援を通じた学生の授業観の変容と今後の展望

学生自身の授業観の変容のまとめは、3. に記しているが、ここでは学生が記した報告書の記載や授業支援検討会後の振り返りをもとにして、授業支援を通じた学生の授業観の変容をみていく。

授業支援前に学生が持っていた授業観を構成する要素としては、教員養成に関わる授業で得た知識をもとにした方法論的なものが多く示された。主なものとしては、

- ・教科内容から児童の興味を引き出し理解させる(楽しい)「授業設計」とその指導方法
- ・児童との信頼関係の築き方と信頼されるための自己開示の方法
- ・多様なニーズをもつ児童への指導や支援の方法（声掛けや指示、発問、机間指導）や環境設定のあり方

などが挙げられる。当該学生は教育現場での教育実習をすでに経験しているが、学部で学んできた教育方法学や教科教育法など、授業づくりの枠組に関わること、すなわち授業者を主語とした授業者視点での「授業の成立」に関わる要素をもとにした授業観を抱いてたといえよう。ここには、まだ授業を受ける児童の側からの視点、すなわち児童の実態を把握・理解し、その児童のニーズに即した視点をもって授業を構築していくという学級臨床的な視点が少ないといえよう。授業を成立させる要素についてはこれまで多くの議論がなされてきたが、児童と教員との信頼関係、児童同士の信頼関係の構築が基盤となることは自明のことで、指導者としての学級担任が最も心を砕くものである。これはベテラン教員においても同様であり、新卒新規採用教員にとっては最も不安に感じる要素である。

次に授業支援後に学生が挙げた授業観を構成する要素を示す。

- ・教員の雰囲気（教員の笑顔や明るく楽しくなる話したくなる雰囲気の醸成）
- ・教員が児童の思いを言葉で表現したり、教員自身の思いを児童に表出したりすること
- ・一人ひとりの個に応じた支援と全体への支援（UDL支援ができる環境づくり）
- ・安心して児童が感じた疑問や気づきを声に出して言うことのできる環境づくり

ここには、前項ではあまり触れられることの少なかった児童の視点からの児童理解に基づいた要素が示されている。いずれも前項で掲出された授業者視点の基盤となる項目であるが、その前提となるものへと気づきが深化しているといえよう。

最後に今後の展望をまとめてみることにする。

①子供理解の視点を深める

- ・児童を正しく見取ること。児童の言動や行動の表われの原因を様々な角度から考察できるようにしたい。
- ・授業中での子供の人間性の育ちや子供たちから学べるものの多さに気づいた。「子供の思いを理解すること」をもっと学んでいきたい。

②学級の雰囲気作り

- ・多様な児童のすべてを笑顔で受け入れる姿勢をつねに持ち、表現していくことで、児童に安心感を与え、児童が感じたこと、考えたことを素直に言葉で表現できる温かい受容的な学級環境を作りたい。
- ・児童との信頼関係形成のために、普段の何気ない会話や児童同士の対話を多く取り入れた授業作り、机間指導などを通して児童をきめ細やかに観察し、個々の児童の実態に応じた褒めるタイミングや言葉がけの内容等も大切にしたい。

- ・個別の支援の提供ができる支えられ支え合える学級の雰囲気作りができるように学んでいきたい。

③支援方法の幅を増やすこと

- ・GIGA スクール構想が進み、1人1台のICT機器の活用が可能となった今、児童に提供できる支援の幅が広がったので、授業者、支援者として、その支援方法を有効に活用できる知識、技能を身に付けていきたい。
- ・子供自らが、学びやすいようにICT機器をカスタマイズしたり、使う場面を自分で決定したりできる環境を保障していくことを実現したい。

以上を踏まえて、持続可能な学校教育の観点から今後の展望を述べる。①に関しては多忙な教職員自体を継続的に支援するためにも、子供理解をすすめるための現場の要請に見合った方法論の提供や学校ぐるみのコンサルテーション体制の確立が急務である。②に関しては、ありのままの児童をまるごとありのままの教職員として受け止めるには、学校自体に「支えられ支え合う（ケアしケアされる）」体制の確立が不可欠である。働き方改革の問題においても、このことを念頭に抜本的な議論と改革が必要である。また、③に関しては、児童の視点としては「使いこなせる文房具」としてのICT、授業者・授業支援者の視点としては、「教えるための道具」としてのICTから脱却し、子供個々の学びのニーズを踏まえた授業づくりや学びにくさを軽減するためのなくてはならない「支援のための道具」（合理的配慮を具現化するもの）として捉え直す必要がある。

以上、大まかなまとめとなったが、令和の日本型教育の実現を踏まえた今後の大学における教員養成課程では、上述の視点を踏まえた体系的かつ体験的な授業を構築していく必要がある。現状の各論的な専門領域の授業に加えて、それらを繋いで実際の教育現場で応用できる臨床的な教員養成のあり方を子供視点で模索し実行することが急務である。

参考文献

- ・教師学入門、近藤千恵・土岐圭子、みくに出版、2006
- ・UDL 学びのユニバーサルデザイン、トレイシー・E・ホール他編・バーンズ亀山静子訳、東洋館出版社、2018
- ・個別最適な学習環境を提供できる教師になるために、袴田奈知、常葉初等教育研究、7、2022
- ・橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究報告（国語科1）—国語科におけるICT活用による授業観の変容に着目して—富山敦史・佐野智子、教育実践研究報告誌、5-1、2021
- ・発達性読み書き障害（ディスレクシア）の特徴と実態に合わせた支援—GIGAスクール構想におけるICT活用による支援—、袴田奈知、常葉初等教育研究、6、2021
- ・『学習指導要領』「指導上の配慮事項」を具現化するために—授業で個別最適化環境を作り出すICT活用—、富山敦史、教育実践研究報告誌、4-2、2021

付記

本研究は、常葉大学2021年度共同研究（橘小学校との連携による教育現場に根ざした現代的・実践的な教員養成に係る研究—ICT活用による授業観の変容に着目して—）代表者：富永弥生）の研究助成を受けたものである。